

平成23年度 内部評価結果の総括

1 はじめに

本評価は、「魅力ある博物館を語る会」(H22)で提言いただいた「外部評価委員を含めた『博物館評価委員会(仮称)』の設置」に向けて策定した「活動目標の評価指標表」(H23)を用い、内部評価を試行的に行ったものである。本評価結果は、博物館活動の改善と充実に結び付けるとともに、活動目標や指標値の修正に反映させ、博物館評価委員会設置の準備とする。

2 自然史博物館の使命

「未来に伝える博物館」

群馬の自然とそのなりたちに関する資料や情報を集め、未来に伝えます。

「魅力を引き出す博物館」

群馬の自然とそのなりたちを探り、その価値を明らかにし、群馬の魅力を引き出します。

「知を広め、高める博物館」

多様な学びの場を提供し、知を広め、高めます。

3 自己評価結果

(1) 資料の収集・保存と活用 (「未来に伝える博物館」)

資料の収集においては、業務を行う学芸係員が8名であること、資料によっては標本化に多くの労力を費やすこと、また学芸係員が展示業務や普及活動に多くの時間を費やしていることを考慮すると、新規登録資料数 8,099 点は大きな成果といえる。これらの資料を登録できた背景には、近年、博物館への信頼度が増し 4,418 点の寄贈資料と 497 点の移管資料の受領が行えたこと、学芸係員による数千点に及ぶ地道な収集活動を行ったことがあげられる。

資料の保管に関しては、電力前年比 15%削減の中、収蔵庫や展示室などの保管場所で、可能な限り適切な温湿度で管理を行った。また、文化財害虫やカビ類に対する燻蒸と忌避対策を計画どおりに行った。さらに、安全な保管を進めるために、平成 24 年度より実施する収蔵庫の「セキュリティ向上のための管理簿設置」や「正基準標本や天然記念物の保管状況点検」を定期的に行う規定を設けた。

活用面においては、収蔵標本をもとにした調査研究はもちろんのこと、企画展や移動博物館における 1,672 点の展示、他館への展示のための貸し出し 244 点、当館ホームページでの登録資料公開や地球規模生物多様性情報機構(GBIF)サイトでの公開など積極的な公開に努めた。

課題としては、現在の収蔵スペースが限られており、分野によっては収蔵のキャパシティを超えているものもある。今後も計画的継続的な資料の収集と保管を行っていく際の障害となると思われ、収蔵スペースの新規開拓と収蔵方法の見直しによる収蔵スペースの確保が急務であるが、その取組は不十分であり、平成 24 年度の課題である。また、収蔵庫の管理簿や、正基準標本と天然記念物の定期的な保管状況点検など

平成 23 年度に新規に設けた作業を着実に遂行しなければならない。加えて、文化財害虫等の忌避行為のための作業も充実させる必要がある。

(2) 調査研究 (「魅力を引き出す博物館」)

調査研究の推進では、昨年度は上野村総合学術調査の初年度であった。同調査は 3 ヶ年計画で行う自然史調査研究で、延べ 25 回の現地調査を行った。また、各職員が個々に行っている調査研究は 13 分野 18 研究、外部研究施設等と連携している調査研究は 26 研究あり、9 名の職員数としては充実した活動が行えていた。研究成果の公表では、発表論文数 22、学会発表数 27、講演会講座等数 14、群馬県野生生物調査・対策報告会の開催など一定の成果を得ていた。

しかし、調査研究では、研究者や研究団体との連携による調査研究に比べ、県民との連携による調査研究が少ない傾向が見られた。県民との連携による調査研究は、一般県民の方々に、より多くの自然についての知識や技能を還元できる機会でもあり、調査研究の大衆化という視点からも、今後力を入れていかなければならないと考えている。また、研究成果の公表でも多方面で数多く取り組んでいるが、より多くの県民によりわかりやすく伝えるための工夫と改善が必要である。特に、学芸係員が行っている講演会講座や学芸員による特別解説や特別展示など、多様な手法を用いた公表を模索する必要がある。

(3) 展示 (「知を広め、高める博物館」)

昨年度の入館者数は 177,698 人であり、開館の翌年度に次ぐ 2 番目の実績をあげることができた。また、抽出調査によるリピータ率は 63% であり、これらは、企画展の魅力とそれに伴う広報活動が一定の成果をあげたためと考えられる。過去 5 年間の企画展観覧者数平均と昨年度の結果を比較すると、昨年度は 15% 増であり、自らの意志で記入するアンケート調査では「展示の満足度」が 79% であった。実施した企画展は、来館者ニーズに応えた最新の研究や情報を反映した「スピノサウルス展」や「脳展」、体験コーナーや生体展示を数多く取り入れた「オシャレな動物展」、定番化してきた冬期に行う「写真展」である。また、常設展では、開館以来 16 年間リニューアルが行われていないにも関わらず、対面形式のアンケート調査では、「展示の満足度」が 89% であった。これは、常設展の作り込みのよさが第 1 であると考えられるが、職員による年間 217 回の迅速な故障修理対応や月 1 回の保守点検と清掃、また延べ 45,000 人に及ぶ展示の解説も効果があったと考えている。

館外での展示の充実については、移動博物館等を行い、観覧者の満足度もまずまずである。

課題としては、観覧者が体験できるコーナーを好む傾向が強まっており、生体展示も含め、今後さらにこの傾向を企画展で強めるべきと考える。また、常設展の老朽化が著しく、機器の故障頻度の著しい増加や交換部品の製造停止、展示内容の陳腐化など課題が山積している。根本的な解決を図るためには、常設展の大規模なリニューアルが必要であり、その準備を行わなければならない。展示解説では、展示の魅力を引き出し、観覧の満足感を高める解説と接遇の質的向上がさらに求められている。クオ

リティチェックは十分に行われているとは言い難く、研修の充実や解説員の意識改革等とともに、課題となっている。計画的組織的な実践的研修の実施と解説資料の充実が急務である

(4) 教育普及（「知を広め、高める博物館」）

学びの魅力を感じられる事業の推進では、実施件数、参加者数共に目標を上回り参加者の満足度も高い。幼児から団塊の世代まで幅広い対象に応じたメニューを揃え、リピーターに配慮した新規メニューの開発や少人数への対応などが評価された結果だと思われる。

課題として、社会教育機関として生涯学習の観点からの大人向けメニューの充実が求められる。また、講座・講演会の集客率向上に向けて、講師と連絡を密にし、内容や方法に関するコーディネートを行うための担当者のスキルアップが求められる。

学校教育支援の推進では、館内事業以外の項目で目標をクリア。あり方検討委員会で指摘された出前授業の充実と目標に届かなかった館内授業件数の増加が課題となる。

ボランティア活動、友の会活動共に全項目で目標値を上回っているが、ボランティアの高齢化、ボランティアでは自主性、友の会では自律性の向上など数値化が難しい課題が多い。

(5) 情報の発信と公開（「知を広め高める博物館」）

各種刊行物の充実では、目標値をクリアしている。

広報活動の充実では、教育委員会や旅行会社を積極的に訪問した。特に新規が多く評価できる。

インターネットによる情報の発信では、ホームページへのアクセス数及びメールマガジンの配信件数が目標に届かなかった。アクセス数を増やすため、レイアウト、内容、動画の利用等について検討が必要である。また、メールマガジンでは、定期的な発行の仕組み作りが求められる。

(6) シンクタンクとしての社会貢献（「知を広め、高める博物館」）

公共の博物館として、その有する様々な資源（資料、情報及び職員の専門性）を活用し、自治体や各種団体への専門知識の提供や講師の派遣など、シンクタンクとしての機能を充実させ社会貢献を果たすことは博物館の重要な使命の一つである。この項目は、昨年度に作成した「群馬県立自然史博物館の使命と事業方針」で、初めて位置づけられたため、昨年度の評価指標表では4つの評価指標で実績データがない。しかし、この業務は博物館として意識して行ってきたものであり、次のような成果があった。

学会・博物館関連団体の委員等を除く、自治体やその他の機関・団体の委員会の委員等として13件を受諾し、学校を除く機関・団体への専門性を生かした講師派遣数は25回であった。学会等への貢献としては、日本古生物学会例会など3回の大会を事務局として実施した。また、他の博物館等への資料の貸出件数は22件であった。これら

の実績数は、他県の自然系博物館と比較し、数少ない職員でよく健闘していたと考えている。

課題としては、マスコミを含む一般の方からの電話やメール等での問い合わせ、自治体やその他の機関・団体からの問い合わせ、大学生・院生の研究指導、県内外の博物館施設等へ助言など、数多く行っていたが、昨年度まではデータの集積が行われなかった。本年度は、これらの項目でデータ集積を行うとともに、「自然史に関わることなら、親切に相談にのってもらえる博物館」との評価を得るために、対応内容はもちろん、話し方、伝え方にも心配りがされたサービスの提供が必要である。

(7) マネージメント（経営）

安全で利用しやすい博物館施設への改善では、点字、外国語表記等が課題である。

観覧者サービスの点検と質的向上では、案内業務のクオリティチェックの実施と職員全員に対する接客研修の実施などが課題である。

博物館の認知度の向上と利用者層の拡大では、成果は上がっているが、未だ知らない県民等も多く、引き続き取組が求められる。

職員の意識改革と資質の向上では、展示室内での行動・言動、利用者の目線に立った接客、管理などについて、問題が指摘された。合同会議等の場で議論し、共通理解を図っていくことが求められる。

博物館活動への理解及び外部協力の確保では、予算確保や企業からの協力の増加に向け、引き続き取組が求められる。

防火意識の向上と危機管理体制の強化では、地震マニュアルの作成や避難場所の掲示を行ったことは評価できる。今後、明文化されていないものを含めて、危機管理対応マニュアルを作成していくことが課題である。

博物館評価システムの構築では、使命と方針及び評価指標を作成した。職員の意識改革、共通理解の醸成に向けて、評価システムを確立することが課題である。